

「グローバル化」を考える

企業経営漫談士 岡野実空

『グローバリズムが世界を滅ぼす』(文春新書)は、2013年末に京都大学が主催した国際シンポジウム「グローバル資本主義を超えて」の備忘録。世界的に著名な E・トッド、H・J・チェンに我が国気鋭の学者が加わり、各企業のミドル必読の示唆に富む議論が展開されています。

今回のコラムでは、まず「グローバル資本主義」の負の部分を確認し、それを踏まえ、ミドルが留意すべき海外戦略のポイントを考えます。尚、「インターナショナルイズム」と「グローバリズム」の違いは、「国境」を前提とするかしないか。EU は後者の例そのものです。

特徴1：経済の不確実性と停滞

直近の「グローバル資本主義」は、2008年のリーマンショックで終焉を迎えたかと思われましたが、しぶとく延命して世界のあちこちで暴れまわり、またバブル？という様相を呈しています。

この「金融資本主義」は、实体经济にも大きな影響を及ぼし、中小企業が潰れ大企業が勝ち残る、弱肉強食の世界を地球規模に広げています。その巨大な能力は、実需の停滞で供給過剰を招きやすく、世界経済を慢性的なデフレに陥れています。

このため、その他の企業もリスクを取ろうとせず、結果がすぐ出ない不確実な投資を控えるため、ますます経済が停滞する悪循環を招いています。

特徴2：「格差」の拡大と固定化

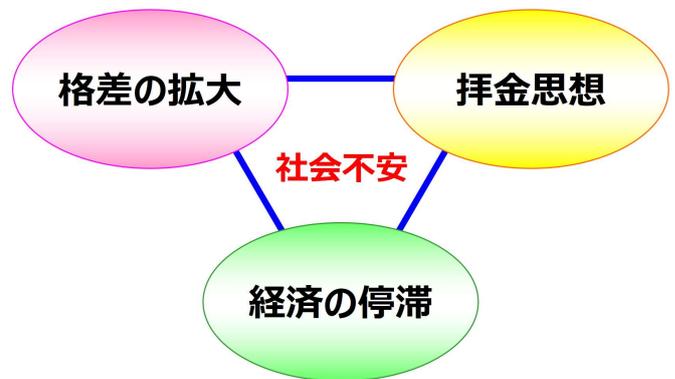
前述の企業規模だけでなく、グローバル企業と地域企業の差も広がっていますが、私たちに最も影響を及ぼすのは、「資本家と労働者」の格差の拡大。ノーベル経済学賞を受賞した、J・E・スティグリッツ氏の「1%の人が99%の富を搾取している。これがグローバル資本主義の帰結なのだ」という言葉は、見事にその実態を言い当てています。

またこの格差は、その拡大以上に固定化が問題であり、中間層を崩壊させて、経済の分野ばかりでなく、社会不安の大きな要因ともなっています。

特徴3：「カネ」がものをいう世界

「グローバル資本主義」3つ目の問題は、「カネ」がすべてという考え方の蔓延。「マネー」の力が非常に強くなって、何でも定量化、数値化しようとする圧力がどこの企業にも広がっています。しかも「短期的な数字」を追うために、設備投資だけでなく、研究開発や人材育成という人的投資も後回しにされており、これが結果として、長期的な成長に必要な、真の生産性向上や、長期的なコミットメントの主な阻害要因となっているのです。

KM1-2 「グローバリズム」の弊害



近代のグローバル化は、まずイギリスをリーダーに、19世紀後半から始まりました。しかし本来、「グローバル化」と「グローバル資本主義」とは別物。第一次世界大戦と恐慌を経て、リーダーがアメリカに交代して以来、新たに「新自由主義」という魔物が世界に広がりました。それは「グローバリズムは良いモノだ」という空疎な思想や風潮です。

世界中に生産や開発基地をもち、調達や販売も同様な「グローバル企業」は、以上のような負の連鎖の推進者。しかしよく考えてみれば、大半の日本企業の海外戦略は、幸いまだその手前の「摩擦回避型」「コスト優位型」から「市場立地型」です。

皆さんは、旧世代の経営層が、単に風潮で唱える「グローバル化」をさりと聞き流し、自社の身の丈に合い、相手国にも利益をもたらす海外戦略を考えましょう。そのポイントは、「ローカル」と「グローバル」という両端の間にある、事業ごとの「グローカル」戦略。製品およびサービスと市場の「特性」を十分に咀嚼して、相手国と顧客に支持される商品を効率的に作り、届けるシステムです。「グローバリズム」は世界を滅ぼす。しかし、「グローカル」が世界を救う！

平成30年2月5日 実空